新宿海上ビル診療所 室賀 一宏　日本TCM研究所 安井 廣迪

温清飲

万病回春

組 成	当帰・地黄・芍薬・川芎 各3.0, 黄連・黄芩・梔子・黄柏 各1.5
主 治	血虚鬱滞, 熱毒内蘊
効 能	養血活血, 清熱瀉火

プロフィール

温清飲は、『万病回春』血崩門に出ている処方で、子宮不正出血や帯下に用いるように指示がある。江戸時代の比較的初期から使用されてきた。また、本方は一貫堂の「解毒症体質」に用いられる柴胡清肝散、荊芥連翹湯、竜胆瀉肝湯の基本骨格を成している。本方の最初の出典は『医塁元戎』とする検討もあるが[1]、『万病回春』の使用法に基づいた浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』の記載が現在の使用法の基になっている。

方　解

黄連・黄芩・黄柏・梔子は黄連解毒湯を構成する薬物で、三焦の湿熱毒を清すると同時に清虚熱の作用がある。当帰・地黄・芍薬・川芎は四物湯を構成する薬物で、血の不足を補い、肝の蔵血機能を調節すると同時に、出血で生じた瘀血を除く作用がある。温清飲はこの2つの処方の合方で、三焦の熱毒が盛んで、遷延して耗血したものを治する。

四診上の特徴

矢数は、本方はたいてい体質的疾患または慢性的に経過したもので、肝機能障害を伴い、あるいはアレルギー性体質といわれている皮膚過敏のものに用いられるとし、よく適応する患者は、この薬の苦みと香気を喜ぶと述べ、その経験から適応を以下のようにまとめている[2]。

① 本方証の多くは慢性に経過したものか、あるいは体質的に本方証のあるものが急性に症状を発したものである。
② 本方の適応する体質傾向として、皮膚が黒褐色、黄褐色を呈し、渋紙のように枯燥しているものが多い。
③ 皮膚病の場合は、多く丘疹性の湿疹で、分泌物はなく、枯燥の傾向があり、瘙痒が甚だしく、掻把によって出血痕を残しているものが多い。
④ 粘膜の場合は、潰瘍の出没を繰り返している。この時は皮膚の色が白くともよいことがある。
⑤ 脈は一定しないが、それほど弱い方ではなく、腹証は多くは心下部及び肋骨弓下に抵抗のあるものが多く、柴胡証に似ている。或いは臍傍臍下に瘀血と思われる抵抗や圧痛の認められることがある。

使用上の留意点

黄芩含有処方のため間質性肺炎や肝障害が出現する可能性があり、注意を要する[3]。

臨床応用

1. 婦人科疾患

林らは、37例の機能性月経困難症患者に対し、温清飲を3周期投与し症状の変化を観察した。その結果、月経時では不安感、耳鳴り、不眠、悪心・嘔吐、下腹部痛、眩暈などが、非月経時では悪心・嘔吐、下痢、眩暈、耳鳴り、憂鬱感などが改善した。さらに投与期間に応じて、症状の改善率が上昇する傾向がみられた。さらにCMI検査では、23%の症例において精神または身体自覚症状のより少ない型に変化していたと報告している[4]。また、山縣も23例の月経困難症に対し温清飲を投与した結果、23例中8例が著効、12例が有効で無効は3例のみであったと述べている[5]。

後山らはホットフラッシュ症状を有し、かつコントロールが不安定な高血圧症の更年期女性のうち、八綱弁証、四診を行い温清飲の適応と考えられた14例を対象とした。8週間の投与後、VAS(Visual Analogue Scale)による自覚症状は72.7±12.4から27.4±15.1に、血圧も170.7±16.5/103.6±15.7mmHgから125.3±14.3/75.5±9.3mmHgへとどちらも有意に低下した。よって、血圧不安定で精神不安の存在が「いわゆる温清飲の証」であると述べている[6]。さらにのぼせ、発汗、意欲の低下を訴えたうつ状態などがみられた症例[7]や、顔面紅潮が強くみられた症例[8]などの報告がある。

2. 皮膚科疾患

高田らは、アトピー性皮膚炎、魚鱗癬、乾癬、掌蹠膿疱症などに温清飲を投与した結果、慢性湿疹、続発性紅皮症に対してはやや有効もしくは無効であったが、その他の疾患では有効性が高く、尋常性乾癬には単独で、掌蹠膿疱症には黄連解毒湯の併用が効果的であったと述べている[9]。

田中らは13例中8例に対しては温清飲単独で、残り5例は桂枝茯苓丸料を併用し3～22ヵ月観察した。その結果、改善率・有用率ともに61.5%、不変38.5%であった。有効例は罹患年数が10年未満で肥満がなく、他科疾患を合併している者で有用率が高かったと述べている[10]。橋本は、温清飲と黄

連解毒湯の併用で、尋常性乾癬56例と膿疱性乾癬2例を加療して、その結果を述べている。それによると、著効13例、有効8例と有効率は高くはなかったが、著効例が多いという興味深い結果であったと報告している[11]。

橋本らは97例の掌蹠膿疱症患者に温清飲を投与したところ、4週間で59.8%、8週間では69.8%の有用率であった。さらに顔が青白くやせ型の症例でやや有用率が高かったが大きな偏りはなく、皮膚症状では特に膿疱について有効率が高かったと報告している[12]。

東は、アトピー性皮膚炎の顔面紅潮に対する効果を検討し報告している。温清飲を単独で用いた10例では著効1例、有効2例、無効7例、他の漢方製剤と併用した10例では有効3例、やや有効3例、無効4例であった[13]。この他、慢性湿疹に対する報告が散見される[14, 15]。田中らは皮脂欠乏症に対し温清飲を使用し、43例中22例で有効であり、年齢別有効性では差がなかったと述べている[16]。さらに透析患者の皮膚瘙痒症[17]、慢性色素性紫斑[18, 19]、寒冷じん麻疹[20]、結節性紅斑[21]に対しても用いられることがある。

3. ベーチェット病、口内炎

ベーチェット病に対する温清飲の効果に関しては80～90年代に集中的に報告されている。橋本らは比較的軽症のベーチェット病30例に対し、温清飲を投与して効果を検討した。その結果、1年後には60%の症例で症状の改善がみられた。特に口腔粘膜アフタは3ヵ月後には有意な改善を認めたが、他の症状では有意な変化はみられなかった。しかし、痤瘡様皮疹や結節性紅斑様皮疹の重症例では、症状の改善を示すものが少なくなかった。眼症状には無効であり、証と有効性に関連はみられず、検査所見にも明らかな変化はみられなかった。よって、皮膚・粘膜症状を主景とする軽症のベーチェット病に使用できる治療法であると述べている[22]。

また金子は、16例のベーチェット病患者に対し二重盲検法で温清飲の治療効果を検討した。その結果、実薬の投与により患者の自覚症状及び臨床症状において良好、やや良好であった者は9例中5例であり、偽薬では7例中2例がやや良好と明らかに実薬の方が改善率が高く、さらに偽薬を実薬に変更したところ明らかな臨床効果が得られた。よって、温清飲はベーチェット病患者の長期の治療に緩徐な臨床効果を得ることのできる治療薬であるとしている[23]。この他にも有効性を示す報告は複数見られるが、口内炎に対する治療効果は高いようである[24, 25]。

また、斎藤らも82例の再発性アフタにおいてやや有用以上で80.4%とかなり高い有用度であったと報告している[26]。

4. その他

小田口らは随証治療を行った高血圧症例の検討で、温清飲の降圧効果が一番高く、陰証かつ実証と、陽証かつ実証の場合に効果的であると述べている[27]。

堀井は、顕微鏡的血尿に対する温清飲の効果を検討している。それによると、瘀血を伴う血尿と考えられた7例に対して温清飲を4週間投与したところ、4例で改善を認めた。無効例は実証と考えられ、かつ合併症を有していたと報告している[28]。この他、特発性腎出血に用いた報告もある[29]。

神谷は、著しい気血不足や腎虚傾向の明らかな歯周炎18例、気血不足や腎虚傾向のない歯周炎14例の計32例の歯周ポケット掻爬後に温清飲を3日間投与した。化膿傾向の強い21例は抗生物質を併用したが、7日後の歯周組織の改善は有効が26例、やや有効2例、無効4例であったと述べている[30]。

【参考文献】

1. 小山誠次: 温清飲(黄連解毒湯合四物湯)の出典再検討, 漢方研究, 466: 401-405, 2010.
2. 矢数道明: 臨床応用漢方処方解説, 22-34, 創元社, 1989.
3. 前田裕幸: 温清飲にて薬剤性肺炎・薬剤性肝障害を発症した1例, 日東医誌, 62(suppl): 234, 2011.
4. 林 伸旨 ほか: 月経困難症に対する温清飲の効果, 産婦人科漢方研究のあゆみ, 5: 19-28, 1988.
5. 山縣猛日: 温清飲による月経困難症の治療経験, 漢方診療, 7(6): 49-52, 1988.
6. 後山尚久 ほか: hot flushesを伴う高血圧症の更年期女性への温清飲投与による臨床効果, 産婦人科漢方研究のあゆみ, 24: 93-97, 2007.
7. 片山恵利子 ほか: 温清飲により, 更年期うつ状態が改善した1例, 漢方の臨床, 58(9): 1751-1755, 2011.
8. 新井信 ほか: 身体の温度コントロールがうまくいかない3症例, 漢方の臨床, 54(5): 752-758, 2007.
9. 高田任康 ほか: 各種皮膚疾患に対する温清飲の使用効果, 漢方医学, 7(12): 13-17, 1983.
10. 田中敬子 ほか: 乾癬における温清飲の使用経験, 西日皮膚, 48(6): 1113-1118, 1986.
11. 橋本善夫: 各種皮膚疾患に対する漢方療法, 皮膚科における漢方療法の現況, 11: 3-27.
12. 橋本喜夫 ほか: 掌蹠膿疱症に対する温清飲の使用経験, 漢方診療, 10(1): 51-55, 1991.
13. 東 一紀: アトピー性皮膚炎の顔面潮紅に対する温清飲の有用性の検討, 日東医誌, 46(5): 753-760, 1996.
14. 手塚匡哉: 痒疹に対する温清飲の使用経験, 漢方研究, 383: 474-476, 2003.
15. 矢数道明: 湿疹の瘙痒に温清飲加連翹, 漢方の臨床, 16(3): 207, 1969.
16. 田中 信 ほか: 皮脂欠乏症に対するツムラ温清飲の止痒効果, 漢方医学, 17(2): 61-63, 1993.
17. 有阪真由美 ほか: 透析患者の瘙痒症に対する温清飲の使用経験, 腎と透析, 35(4): 565-569, 1993.
18. 大草康弘 ほか: 温清飲が奏効した慢性色素性紫斑の2例, 漢方診療, 13(8): 22-23, 1994.
19. 寺木祐一 ほか: 慢性色素性紫斑に対する温清飲の治療効果, 臨皮, 45(10): 817-819, 1991.
20. 稲木一元: 寒冷じん麻疹に温清飲有効例, 活, 29(3): 55, 1987.
21. 山本淳子: 温清飲がよく効いた結節性紅斑の1例, 漢方と診療, 3(1): 50, 2012.
22. 橋本喬史 ほか: ベーチェット病における温清飲の治療効果, 診療と新薬, 20(10): 2283-2285, 1983.
23. 金子史男: ベーチェット病に対する温清飲, Prog. Med., 6(2): 384-386, 1986.
24. 井上 透: ベーチェット病に対するツムラ温清飲の効果, 漢方医学, 6(3): 11-12, 1982.
25. 新井川勝久 ほか: ベーチェット病における温清飲の治療効果, 漢方医学, 17(7): 244-245, 1993.
26. 斎藤 力ほか: 慢性再発性アフタに対する温清飲の使用経験, 35(4), 1227, 第40回日本口腔科学会総会抄録, 1986.
27. 小田口 浩 ほか: 随証治療を行った高血圧症例の検討, 日東医誌, 59(suppl): 159, 2008.
28. 堀井明範: 顕微鏡的血尿に対する温清飲の効果について, 第11回 泌尿器科漢方研究会講演集1: 14-17, 1994.
29. 小川幸夫 ほか: 特発性腎出血の治療, 日東医誌, 21(4): 226, 1971.
30. 神谷 浩: 歯周ポケット掻爬後に対する黄連解毒湯と温清飲の応用, 日歯東医誌, 13(1/2): 7-11 1994.